

南洋文化

大江洪太郎

盛夏の國南洋、紺碧の水面に靜かに浮ぶ島々の、椰子の葉蔭に楸眼をむきぼる悠長な土民の間には、昔からいろく奇怪な傳説が傳はり、興味ある風俗や習慣が今でも残つてゐる。その後この土着の土民の幼稚な文化に、古くから入り込んだ支那人の文化、それから十六世紀の始め頃から渡來しはじめたポルトガル人、續いてスペイン人、イギリス人、オランダ人等の近代文化が移植され、地方によつて種々の形態を成してゐる。

一口に南洋といつてもその地域は非常に廣大で、而も海によつて交通が遮断されてゐるから、その土民の文化には島々によつて相當大きな違ひがある。たゞ酷熱の南國といふ地理的共通點から、そこに出來る產物にも共通性が生れ、従つて土民の文化や風俗習慣に氣候風土の制約から來る共通點のあることは無視する事が出來ない。それから第七世紀の頃に印度の佛教徒が大群的に佛領インドシナ、シヤム、マレー半島、ジャバ等へ渡航し、南洋一帯の島々を往復したから今でも佛教文化が土民の間に根強く植ゑつけられてゐて、回教徒の文化と共に大きな特色をなしてゐる。尙近代になつて歐米人

が新しく移植した文化が、次第に地方的特色を抹消しつゝあることは争へない。次に各地の風俗習慣、それをひつくるめての文化狀態を簡単に記述することにする。

佛領インドシナ

佛領インドシナはもと支那の勢力範圍だつたが、フランスの皇帝ナポレオン三世がこの地の領有を企て、一八五八年スペインと一緒に安南を攻撃し、翌年にはサイゴンを占領し、一八六二年のサイゴン條約以來フランスの優秀な植民地となつた。人口は千八百五十萬で二十六萬餘平方哩といふ廣大な面積に比して非常に稀薄である。大部分は土民だが、そのうちフランス人が約二萬人ゐて、主として役人になつてゐる。支那人も多いが大部分が商業に従事してゐる。

交趾支那、カンボジヤは共に僧侶と寺院が極めて多く、至るところに托鉢僧がゐて、まるで僧侶の國へ來たやうである。佛教は小乗で、一つの寺院に二百五十名からの僧侶や比丘尼がある。そして毎日讀經するのだが、その經文は椰子の葉の両面に文字を彫刻したものをを用ゐる。

ラオス土人の結婚には面白い風習が残つてゐる。黃道吉日に同數の男女が兩方の家から酒肴や野菜を籠に盛つて門前に出迎へる。男群は婿方、女群は嫁方で、前者は老爺が、後者は老媪が大將となつて兩方で競争ごつこをする。女群は手桶や野菜籠等を手にして男群の侵入を防ぐが、男群は遂に女群を破つて突入する。かうして男群が勝てば花婿を門外に歡迎し、改めて堂々として乗り込む。式は僧侶が司るので、讀經が済んでから、金盃と蠟燭とを持出して夫婦の誓ひをさせる。式が済むと友人や知己が離れ小屋に二人の當座の荷物を

運んでやり、二人はこの小屋で数日の間新婚生活を味はひ、それから家へ歸るのである。

ジャバのソロ王城内で催される舞樂の中にスリソビの舞といふのとベドヨの舞といふのがある。これは印度の古風の踊りで、カンボジャでも王は二百餘名の後宮にこの舞を舞はしめてゐる。印度の神話を舞踊化したものであるが、美人が鳥獣や勇士と戦ふといふ筋で、音楽入りのなかく賑やかなものだ。

このカンボジャの山奥にチャム及びモイと呼ぶ二藩族がある。昔ある探險家がこの兩族には尾が生へるといひ、彼等の住居の床の上には何すおきかに直徑二寸位の孔があつて、坐る時に尻尾が邪魔になるのでこの孔の中へスツゴリ入れるやうになつてゐるのだなどといつたことがある。それを聞いて、この新たに發見された有尾族を見物に來たアメリカ人が少くなかつたといふ。それほどこの地方は未開だつたのだが、最近では海岸地方には可なり新しい文化が滲入つてゐる。

安南人は音楽が好きでよく一種の弦を奏するが、それは日本の三味線に似てゐて、特に神繩や奄美の蛇皮線を思はせる。これを弾きながらジブシーのやうに諸方を流れ歩く旅人が多い。

シヤム國

シヤムは今でも國境のはつきりしない所があるので、人口や面積も正確には判らないが、大體に於て面積五十二萬平方キロ、人口一千万といはれてゐる。住民の特徴は、白人種が非常に少く、それに反して昔から支那人が極めて多い點である。支那人は元來放浪性が強く、内亂と生活苦の本國を逃れてシヤムへ來るが、シヤムは本國

よりも遙かに平和で生活が樂だ。そこで彼等は永住する氣になり、ラオス女と結婚して混血兒を生む。出産率などはシヤム人より高い而も政府は支那人を自國人同様扱ひ、混血兒には徴兵の義務さへ負はせてゐる。かうして支那人は益々増加するばかりで、今ではシヤム人自身の生活が脅かされる懼れさへある。

併し一面から云へば、シヤム人が常に外部の列強に壓迫されつゝ、尙今日の獨立を保つて來たのは、この混血人種に特有の粘り強さが最大原因をなしてゐる。それと同時に全國民が宗教的に完全に統一されてゐるからである。

シヤムは信教自由の國だが、國民は大乗のマハニカイと小乗のタマニートを信奉し、皇帝自身が佛教の最高權威者である。大僧正は先帝の皇弟でその下に四人の僧正があつて政治の大權を握つてゐる。皇帝は春秋二期に親しく寺詣でをされるが、その時の行列は昔の我が國の大行列そのまゝの嚴めしさがある。國民は一人前になるには必ず何箇月か僧院に入つて僧侶生活をせねばならないことになつてゐる。かういふ状態だから、國內到る所に宏壯な寺院がある。

風俗の中特に目立つのは、大部分の女が男と同様に斬髪してゐることである。但し若い娘は必ず前髪を少し残しておく。これは昔ピルマの侵略を受けた時、女子も男装して戦つたその遺風によるのだといはれてゐる。それから男子はバヌンといつて派手な色彩の絹布の腰巻をつける。その明るい派手な色彩は常態地らしく快いが、面白いのはその色彩が日によつて異なることである。シヤム人は毎日違つたバヌンを用ひ、従つてバヌンの色を見ればその日が何曜日であるかと判るといふ、一種の宗教的儀式である。

メナン河では廣東の珠江で見るとやうな水上市が開かれる。舟が岸から際がれ、それからそれへと幾百隻も横いてゐて、鶏卵、魚肉、野菜などを夕方から翌朝まで夜市をする。その間を若い娘が舟歌を歌ひながら自ら撮をとつて漕ぎまはるのは確かに異風景で、下流のパンコクの町が東洋のベニスといはれるのも尤もである。その他にも雨期になると方々で水上市が開かれるが、これは洪水の多い國、熱帯の國の自然の產物であらう。

シヤムには米産が非常に多いが、田植の方法は日本と殆ど同様で一家總出で田植歌を唄ひながらやる。平和な風景である。

マレー半島

マレー半島は人口約三百三十六萬で、歐米及び東洋の文明人の移住者が非常に多く、ジャバと共に最もよく開けた土地である。先住民族はサカイ族とセマン族であるが、共に文化の程度は極めて低く、奥地にゐて多くは一定の土地に定住せず、毒矢を以て動物を獲ることを業とし、時々支那人部落などへ物々交換に現はれる。その他にも約十二、三の民族が雜居してゐるが、所謂マレー人は脊が低く射撃心が強くて勤勉さが無い。政府は常に彼等を引き立てようとして醫科大學などを作つたりしたが、卒業生は殆ど支那人や印度人で、マレー人の卒業者は皆無に等しい有様だし、官廳の使用人に採用しようとする努力してゐるがその成績もあまりよくない。しかし最近餘程自覺して來て、農業や漁業に従事してゐる者も増して來たし、特に自動車の運転手は彼等が殆ど獨占してゐる。たゞ商業だけは完全に支那人に壓へられて全然見込がない。

彼等の大多數は回教を信じ、毎金曜日を禮拜日として、普段は朝

夕二回祈禱するのだが、この日は五回である。彼等の最大の目的は一生に一度はメツカに巡禮し、歸途メデイナを拜んで教祖の墓參をなし、白い帽子を冠つてハジの稱號を買ふことである。彼等はこの目的のために働いてゐるので、ハジになれない者は人間最大の不幸者とされてゐる。メツカ参拜の日が近づくこと、全國から人々がシンガポールへ集り、幾隻かの船に乗り込んでアラビアに向ふ。確かに異風景である。

シンガポールやベナンは開港場であるから、この人種が集まり、文字通り國際都市で、そこに展開される文化も歐米の近代的都市と何等異なる所がない。その間で支那人が最も大きな勢力を占め、次いでアラビア人、ボンベイ人、インド人に金持が多い。近郊には日本人もゴム園に相當發展してゐる。このシンガポールは南洋に於ける最大の近代的都市で、その熱帯地らしい、明朗な風光、タンジロンカトンの禪頭の絶景などは旅行者の頭に深い印象を残す。

スマトラ島

スマトラ島は南洋諸島中一番西に位してゐるから、インドやアラビアと最も古くから親しみ、また歐洲との交通も最も早かつた。しかし地勢や産物の關係から比較の未開で、人口なども面積の割に非常に稀薄だ。人種はバダク族、アッチン族、メナガポール族、バスマ族等が雜居してゐて、白人種は非常に少い。

バダク族の住居は床下が高く、ボルネオ人と同様階子によつて出入する。家の棟には牛角やうの飾りをつけ、祭禮には男女とも牛角やうの頭飾りをつけて踊る。階級制度が非常に嚴格で、貴族と奴隷との結婚は禁じられてゐるし、捕虜や破産者は奴隷としての制裁を

受けねばならない。宗教は回教にヒンヅー教を交へたやうなもので上神は天に在り、中神はベヌワで中間にあり、下神は地下にあるとしてゐる。しかし近年は新教が熱心に傳導されて相當の信者を持つてゐる。

アツチン人は都會の者と山の者との間に著しい風俗の相違がある。支那人の密輸入による阿片が好きで、猜疑心の強い惰け者である。男は支那股引またはポルトガル風のカルサン股引をはき、女は頭に粗布をかけ、處女は前髪を下げて、物を運ぶ場合には大體頭に載せる。樂器にはアイヌ人の使ふムツクリと同じものがある。この人種の間に土語でガンドリといふ祭禮があつて、回教祖の誕生後三日目七日目及び十四日目に祭禮をあげて住民に施與したり、祈禱したり厄拂ひをしたりして、夜を徹して祝舞する。

メナンガポール族は鍛冶がうまく、刀劍の製作に秀でてゐる。家將相續は女系で男女關係は嚴格を極め、他族に聞くやうな問題はない。バスマ人には金持と美人が多い。當に嚴格な宗教的儀式に従つて生活してゐる。

ジャバ島

ジャバは昔インド佛敎の洗禮を受け、その美術や佛跡が今尚各所に残されてゐるが、その後回教が輸入されるや、その勢力は忽ち佛敎を征服して全島を席捲してしまつた。十六世紀の初め頃からは、オランダ人がリーダーとなつて盛に産業の開發に努めた。以來極楽島として憧れてゐたこの地へ歐洲人や支那人が續々渡來し始めた。來てみると生活が簡易で各種の産業が自由に開發されてゐるので、渡航者は年と共に増すばかりで現在では日本の約六割に相當する面

積でありながら、三千六百萬の人口を擁してゐる有様だ。

土著人種はマレー系の黒人だが、性質は温良で容貌は日本人に似てゐる。土人の他に古くから關係のあるオランダ人や支那人が多く殊に支那人は四十萬を越え、土人との間に雜婚が盛に行はれて、混血兒も極めて多い。

法制はオランダ國法を基礎として土人の慣習法を取入れてゐる。全島を十七州に分け土人の知事とオランダ官吏の理事官を置き、その下に土人の郡長を置いてゐるが、それらの任免は一切上級オランダ官吏の掌中に握られてゐる。また東インド諸島ではオランダの本國人たる外國人たるを問はず、凡て入國税を取つてゐるが、それがために浮浪人の少いのが特徴をなしてゐる。

かくてジャバの文化は歐洲や東洋の文明國の文化に何等劣るところなく、完全に歐化してゐる。鐵道は全島に亘つて東西に敷設され自動車道路は完備し、教育機關も進歩してゐる。ジャバは南洋諸島中氣候が比較的好く、物資が極めて豊富だからである。

土人中にはオランダ人との混血が多い。そしてこの混血兒が將來の心配の種とならうとしてゐる。元來植民地へ來てそこに永住するには何うしても同化しなければならぬ。土民を懷柔して治めねばならぬ。そこで雜婚が行はれ、混血兒が生れる。これがオランダのジャバ領有當時の方針だつたが、年を経るに従つて混血が不平を云ひ出した。父は白人で母は落女、そして自分はその雜種である。しかも父は母と自分を殘して本國に歸り、再びジャバへはやつて來ない。かうした慘酷な實例があまりに多いので、混血の青年は境涯を悲しみ、オランダを憎んで、遂にエルペルフエルトのやうな熱

血青年が現はれて暴動を起さうとしたりする。だから今日のオランダの心配の種は、日貨の侵入と共にこの點に注がれてゐると見てよからう。

ソロ王城では時々スリンピの舞とベドヨの舞を台座に供する。王宮には九歳から二十一歳の二百餘名の舞姫と俳優がゐて、朝夕舞を授けられてゐる。土族の娘の中で勇敢で機巧な者は披露されて王宮で舞はれ、成長する間に王子の眼にとまつて寵を受けた者は後宮となる。二十一になつても格別の寵を受けず、また特に舞の優れた者でない限りは歸つて家に歸つて更紗の製作に従ふ。

一體ジャバの土民は音楽や芝居が非常に好きだ。だから王城内に多くの俳優が舞はれたりするので、その他にも材料を傳説から取つた英雄物語の古典劇が多く、近くは西洋の俄劇に模した新劇が行はれ、影芝居の如きは古代から盛に行はれて來てゐる。樂器なども多種類に及び、衣裳の如きも随分凝つたものがある。

ポルネオ島

ポルネオ島は面積二十七萬平方哩といふ廣大な島で、島の中央は岩石峨々たる高原をなし、その周圍に果しない大森林や沼澤や三角洲等の大低原を展開してゐる。而もこの大低原は雨期になると河水が氾濫し、水上が唯一の交通機關になる。勇敢で熟練した主人の腕は矢のやうな速力で丸木舟を走らせ、奥地深く湖るのである。

ポルネオの歴史は全く漠然たるものだが、たゞ他の諸島と同様至るところにインド教の遺跡が發見される。ギルトガル人に發見される前はマレー人やその他の島々から移住した土民が全島に擴がつて當時既に二百萬に達してゐたといふ。その約四分の一は純マレー人

で、他はダヤーク人が大多数を占めてゐる。ダヤークは海岸に住むものと山地に住むものとの二種類あつて、近隣の他種族の血の混つたものが多い。山地に棲むダヤークは自ら海岸を捨て、奥地へ奥地へと侵入したが、彼等には首狩りの悪習があつて、若者は敵の首を取つて來ない間は一人前の男になることが出來ないことになつてゐる。首は彼等にとつては最大の寶物であり裝飾であるのだ。彼等の間で古くから行はれてゐる凱旋舞といふのは、この風習から來たもので、妻が夫を河邊に迎へ、椰子の葉に敵の首を包んで天高く掲げ、先づ機捷の儀性をバリツラキに捧げた後、女は手に頭を掲げて巧ましく機捷舞ひをする。しかしこの首狩りの悪習も文明の浸透と共に段々衰へ、次第に馴化されつゝある。

土人の服装は、女子は短い布片を腰にまとい、男子は褌をつけるか全裸體かである。女子の中には胸から腰にかけて藤製の環を巻いてゐる者がある。一種の貞操帯である。

住居は幾百尺もの長い一棟を作つて、その中に幾十家族が同居する。その長屋は床が高く、二木の格子を以て出入する。英領のブルネイには水上家屋が多い。家屋は水上に建つてゐて、交通は凡てカヌーによる。こゝはゴンドラならぬカヌーの都で、東洋のベニスと呼ばれてゐる。

次に土人の結婚の儀式を紹介しよう。先づ結婚には吉日を選び、新婦となるべき者は村女に助けられて、米の粉を白粉の代りにして化粧し、なよ／＼として新郎の來るのを待つ。新郎は美しく飾つた馬に乗つて回教の會堂に行き、村長またはハジの前で誓ひを立て、篋に納めた唇を赤くする檳榔子で頬を打つ。そして膝をかかめて新

婦が新郎の足を洗ふ。これは婦和の式で、續いて夫は三進の飯を新郎の口に入れてやり、残りを自分が食つてそれで式を終る。披露の宴は鐘、銅鑼、太鼓、胡弓などを奏して徹宵して客を勞ふので、その酒宴は極めて盛大である。

セレベス島

セレベスは中央に高い山脈が馬の脊のやうに通つてゐるので、東西の交通は極めて不便で、西部は昔は海賊が暴れ狂つた地方で、今でも住民は主として蕃族である。南方にゐるブギス人、北方にゐるミナハサ人を除いては、他は凡てボルネオ蕃族程度の蕃風を持つてゐる。トラジャはダイヤ人と同じく、敵の首を狩つて賞とした時代があつた。今ではそれほどでもないが、男女とも頭髮を長く伸ばして幅廣の袴をしめ、もの凄く恰好をしてゐる。彼等の信仰は天を父とし、地を母とし、自分等は谷底に住んでゐる。自分達は死んでから母の許へ行くのだから、山の頂や平地に住まないで谷の底に住むといふものである。不思議なことに彼等は三年毎に故人の骨を掘り出して先祖祭を行ふ。その時の祭禮の儀式は日本の古風な式に似て極めて盛大である。

ミナハサといふ人種は南洋第一の利巧者で頭がよく、官吏や學校教員として社會的に相當重要な地位を占めるやうになつた。

セレベスは一般に椰子の産額が多い。南海岸のマカツサルは全島の首府で、人口約五萬五千、一八四八年の開港以來貿易が逐年増加し、重大な開港地である。北端のミナハサの港は市街が非常に美しく、商業地域、支那人街、歐人街に別れ、人口約一萬、その内支那人三千、歐洲人六百、アラビア人三百、日本人百といはれてゐる。

北の方のサンギールといふ島では、キリスト教が傳導されるまでは盛に嬰兒殺しの風があつた。島が小さくて耕地がないので、常に食糧問題が起つて養つて行けなかつたからである。しかし宣教師達が椰子の植ゑ付けをはじめてから、生活も樂になつて、この悪風が次第に衰へた。セレベス島の南方には小スンダ列島があり、東にはモルッカス群島があつて、各々特異の風俗習慣や文化を持つてゐるが、こゝでは割愛することにする。

フィリピン群島

フィリピン群島は大小七千八十の島から成り、總面積十一萬四千五百平方哩、人口千二百萬餘といはれてゐる。その九割はキリスト教徒族(タエログ、ビサヤ、イロカノ、ビコール、パンパンガ、パンガシナン)で、他は回教徒その他の非キリスト教徒族である。言語は驚くなかれその數七十餘種といはれてゐるが、主なるものは前記キリスト教徒族の六、七種に過ぎない。スペイン語、英語が最も廣く用ひられ、前者が凡そ百萬、後者が十五萬人に通ずる。

在留外國人の數は昔は支那人が第一位を占めて、少くとも十萬人を越えてゐたが、その後入國を禁じられて今では五百人くらゐである。次いで日本人が一萬三千人、その他米、西、英、獨、佛等があるが、米人は海軍を除いて五千人、フィリピン獨立案が通過してからは一併減少するであらう。

島内の教育、衛生、土木方面については、米國領有以來大いに進歩向上を示してゐる。米國政府は島民の教育に銳意努力し、また英語の普及のために大いに努めた。小學校は七箇年卒業でその數大略五千校、中學校は四箇年卒業で七十校ある。その外大學もあり、女

學校も専門學校もあつてアメリカ式の教育を施してゐる。政府は教育費として毎年人口一人當り一圓十錢ばかり支出してゐるといふ。衛生状態もスペイン領有當時に比較すると遙かによくなり、悪疫の流行少くなつた。

フィリピンは女は男卑の國である。婦人の社會上並びに家庭上に於ける地位は、他の東洋民族の婦人に比して高い。アメリカの影響でもあらう。また國內では鬮牛が公然と許されてゐる。鶏の蹄に長さ二寸ばかりの鋒利な刃物を縛りつけて置合せ、兎物は柵の外で見ながら勝負を賭けるのである。この殘忍極まる遊戯はスペイン鬮牛の遺風の變化したものであらうと思はれる。

パギオ邊のイゴロト族の持つ習俗の中、長者の葬送は實に變つてゐる。長者が死ぬと、高い塚又は高檜子のやうなものに倚らせて生きた姿そのまゝにし、家族はその周圍が連日連夜金の盡きるまで知己を招いて酒宴をする。その後死體を深山に抛へて行き、深い孔の中に投げ込むのである。教習室に於ける葬儀及び葬地等は、スペインやイタリーなどと同じく、毎年十月三十一日に大祭を行ふことになつてゐる。

以上のやうに、南洋諸島には各種の土風が在り、各々特異な風俗や習俗を持つてゐるが、先進國の文明が次第に浸透して、年一年と開化しつつある。

警察と趣味

川上餘態

はしがき

警察官と趣味——法律と云ふ國家の絕對權力を稱とし、規律と云ふ嚴格な統制下にあつて日夜社會治安の任に終始する吾々警察官と趣味——およそ異様なコントラストで、如何にも縁遠いやうに一般人は思つてあらうが、それは皮相の見である。素より警察官は不眠不休だ。その職責は重い。しかし、滿を持して放たざれば強弓も遂には折るゝ。乃ち忙中閑を得て趣味を解し、情操を養成し、和やかな氣分で民人に接遇すると云ふことは、よりよき警察顯現の上には是非とも必要ではあるまいか？とは、私が常に筆にし、口にする持論である。

我が蘇東廳淺野警務課長は、初度巡視としての訓示の劈頭「警察官は須らく趣味を持って」と絶叫せられた。其の瞬間訓示速記中の私の頭には空谷の聲響に似た感謝の情が沛然と湧いた。そして、退廳後盆栽の手入にいそむ床しくも亦風流な心情、夕食後一日の勞を忘れて遊音器に聞き入るほゞ笑まし一家團樂、深夜、理智的な眸を

輝かせて讀書に餘念ない頼母しい姿、さては、日曜日清流に輪を垂るゝ無我の境地、其の他、困甚、各種スカーツ等々……かくてこそ人生の意義があり、繁劇な警察事務に對する明日へ！のエネルギーが培養せらるゝのだ！と電光石火の如く閃く日刺那、課長は一段と聲高に「諸君は國家の爲め各自夫々の分務事務に對する趣味を涵養して本島警察の向上を計れ！」と喝破された。

此の訓示後私は何を考へさせられたか？其の結果が本稿となり、特に「警察と趣味」と題した所以である。従つて本稿に所謂「趣味」とは、個性によつて趣を異にし、環境によつて變化する個人的乃至地方的趣味の謂ではない。

趣味と快樂

「趣味」の重大性と效用とを強調するため本項に就て一言さして置きた。

心理學者や哲學者乃至は宗教家等の言を依つまでもなく、「趣味」と單なる一般的「快樂、娛樂」とを混同してはいけない。云ふまでもなく「趣味」と云ひ「快樂」と云ふも共に精神的にも物質的にも將又肉體的にも人生の慾望を満足せしむること（時により種類によつて趣味には肉體的苦痛を伴ひ、快樂には物質的損失を招くこともある）が目的であつて、之に對する憧憬、執着を覺え、其の進行中興味、研究等の心理作用を伴ひ、愉快、爽快、慰安等の満足を得て「歡喜」の終點に達するものであるが、「快樂」は多く遊戯的にして人的對象を必要とし、且つ刹那的や一時的のものが大部分を占めて幻

滅や弊害を招致し易い。さればにや漢書漢武帝の秋風辭にも「歡樂極兮哀情多」と見えてゐる。之に反し趣味は真剣にして常に永續性を帯び、單獨的にして不純なく、希望、効果を齎らすものである。

故に、前者は人により境遇によつて滿たされぬこともあるが、後者は老幼男女、智鈍賢愚、貧富強弱、榮枯盛衰、悲喜昇沈皆夫々分に應じ難に隨ひて相當の満足を得るものである。彼の遊興による下劣な享樂や、貪慾を果さん爲の卍倖心に基く輪廻行爲の如きを、神聖なる「趣味」と混同視されては世も早や末路で遺憾痛恨此の上もない。於茲、「快樂」なき人生は寂寞である——とは云へるが、「趣味」なき人生は到底あり得べきものではない。宜なる哉古人も「人生は趣味に生きる」と云つた。とまれ、兩者の嚴密正鵠なる區別解釋は斯道専門家の權威ある説に據ることとして、私はペンを先に進めよう。

職業（仕事）と趣味

趣味なくして研究心なく、研究心なくして創造力なく、創造力なくして進歩は到底あり得ない。此の意味から、趣味なき仕事は決して成功すべきものでなく、早晚廢頽、没落の悲境に陥るは明かである。即ち「趣味」は社會の進歩を促し文化の發達を助長する。

試みに思へ。彼のあとけない幼兒の世界には玩具があつて漸次智能的發育を見る。老先短かき老人の爲には子守があり、お寺詣りがあつて甞ては人世の能事畢る。共に分に應じた仕事と見る事が出来る。炎天下に於ける百姓の勞苦に對しては、誰もが嘸かしと思

うであらうが、草を掘り小石を除けつゝ一紙々々と耕し行く農夫の心境に湧く趣味は、唯農夫のみが知るたゞに餘る候への憧憬だ。畫家の描く一線一筆、彫刻家の揮ふ丹精な一刻々々、創作家の思索に生るゝ一句一節、其の神祕な藝術心、創造力も所詮は斯道に對する「趣味」の發露と云はずして何ぞ。それが總てはサロンの特選となつて糊糊たる偉彩を放ち、又は天下を轟動せしむる名作となつて洛陽の紙價を高めるのだ。昔節幾年、一室に閉ぢ籠つて研究に餘念ない科學者の「趣味」の精品は、總ては自然界を壓倒する科學の脅威！發明！となつて人生無限の前途に偉大なる光を放射するのだ。波靜かなる青海原、款乃の聲朗かに響を清く端頭の心は人知らぬ快絶の躍動であらう。何となればいづれ將來は海運業界の輝く王者として、怒濤を越つて大洋を征服すべき希望への試練なのだから、其の他教育家は教育家として、醫者は醫者として、軍人は軍人として役人は役人として、商人は商人として各々其の道によつて湧く「趣味」は、視じ来れば際限がなく、求むれば滾々として洩れども盡きぬ趣味の泉を發見することが出来る。かくてこそ人類社會は無限に發達し、人生への希望、執着は無窮である。私が斯うして寂しい候の夜の幾時間づつを費してタド／＼しい、ペンを運んでゐるのも亦「趣味」の現れと云ふことが出来る。職業は神聖なり」とは、外見上の種類こそ異なれ、總て其の職業の隆盛上缺くべからざる原動力たる趣味に對しての詮釋に外ならない。

然らば、我警察界には如何なる「趣味」が存在するか？警察官としての吾々は如何なる「趣味」を發見し、如何なる「趣味」を基調として本島警察向上の爲に躍進すべきであらうか。

警察官と趣味

若かりし日、警務調査試験口頭試問の際「君は何故に警務調査を志望せしや」との試験官の問に對して「好きですから……」と何等の技巧もなく率直に應答せしは蓋し私一人のみではあるまい。其の「好きですから」が所謂「趣味」であり、警務調査でふ職務に「趣味」を持つ……との意思表示であつたのだ。試験官が微笑と共に頷つかれたであらうことは勿論である。

さなきだに緊剛な警察事務は時勢の推移、本島の内地延長、開發機關の完備等に依つて益々複雑化し、實務の第一線に立つ吾々の職責の如何に重且つ大なるかは往時の比ではない。而して、之が遺憾なき遂行は一に絶えざる努力を必要とし、其の努力は「趣味」の發動によつてより効果づけられる。即ち「趣味」に立脚しての勤務は總てが自發的であり能動的であり、創造的であつて現職に對する恒久性を帯び、黙々たる中にも研究心熾烈にして現在に甘んずることなく、事に臨みて徹密徹底、總有必要條件を具備して不知不覺裡に事務能率の増進を窺はす。之に反し、「趣味なき勤務は總てが受動的であり、濶縫的であり、姑息的であつて永續性に乏しく、徒らに倦怠のみ伴ひて誠意を缺き、表裏多くして動もすれば事務の滯滞を來し、日夜案ずるところは事務にあらすして「如何にして來るべき行政整理の荒浪を乗り切るべきか」の一事である。のみならず、時に同僚の事務能率にまで悪影響を及ぼすと云ふ例は尠なくない。彼の「出張魂性」と云ふ厭な言葉は、職務に對して趣味なき人への戒

省であり、蔑視でなくて何であらう。浅野警務課長の所謂「分際事務に對して趣味を持つて」とは、職務に對する最良の趣味を演義して能率の増進を圖れ！との意味にして、強ち、燈のつくまで退廢するな、日曜日も出勤せよ。徹夜して事務を執れ。總てを犠牲にせよ！との謂ではないと思ふ。

趣味的職務によつて勇往果敢な威風を遺憾なく發揮し、そして、退廢後や日曜祭日には個人としての趣味を忘れない——と云ふ節度あり餘裕ある心掛こそ私が期待して已まない理想の警察官である。退廢の早、晩によつても其の人の職務に持つ「趣味」の濃薄を忖度することが出来はすまいか？ 殊に、一日の事務に胸の透くやうな名裁決を下し、折池片手に遠渡と歸り行く上司の後姿、それは部下指導上無言の訓示であり、將來善々の學ぶべく、實行すべきことなき絶頂であらねばならぬ。

扱て、單に警察事務と云つても其の範圍は廣く區別は多い。勿論一事に偏せず、萬事に通曉した徳通の利く警察官こそ理想ではあるが、神ならぬ身のさうばかりは行かぬ。又、適材適所も人員の都合や上司の考へ等で現在のところ或程度までは實現不可能を覺悟せねばならぬ。そこで常に事務に對して關心を持ち、「趣味」によつて未知を開拓する——と云ふ必要が生じて来る。諷いやうだが「好きこそ物の上手なれ——と云ふ俗言は、趣味によつて事は成就する——との諷告なのだ。單調だ、平凡だ、無趣味だ——と不平、不服を洩らす人は自己の分際事務を侮辱し、自己の不誠意不熱心を暴露するやうなもので憤まねばならぬ。幸ひ、私の此の拙ない一文によつて、各自常に對する不満の聲が後を絶ち、上司不在中の臥辭、机間の遊戈

等が過分でも減じて事務能率上貢獻する處があつたならば、私が本文執筆に費した幾時間かの勞は酬みられて餘りありと云ふもの。など、以上臆面もなく所懐の一端を大言壯語したが、斯く云ふ私とても平凡な未完成の一端盡て些か映り、吹雪ではある。でも過去を顧み現在を思ふとき、常に「趣味に基く人間の性根は無限り」との信念によつて終始一貫して来たことは事實である。即ち、拜命以來の警務事務たる外勤、派出所、庶務、審判教育から警務、統計、保安、衛生、高等、戸口等殆ど全部に亘る内勤事務及び外勤監督（五年の中一年は藩地の巡視區監督）等を經過して来たが、是等の事務に就ては新規な一、二の有形無形の創造的勤務の痕跡を残して来たものがせめてもの慰安である。

先づ、多数職員達の總てが齊しく口にする「無味」「平凡」の代表的な戸口事務からペンを進めて、漸次各分際事務に及び、「趣味」が那邊に潜在するや？を私の體験に照して検討し、探索して見よう。

一、戸口事務と趣味

靜かに啓る紅花燈二重（現在こそ支給されるやうになつたが以前は自費自辨だつた）に對する限りなき愛着、此の燈のみが持つ頑固たる香氣に出勤直後早くも爽快の氣身心に漲つて、朝の澄みきつた執務窓には煙が上にも拍車がかげられる。筆を執つて紙に向ふ際の透徹した心境——筆と心と紙との一致、醜い愛慾の俗域から脱して無私の境を彷徨する幾タイム——それは、戸口係のみが持つ唯我獨尊の境地であらう。同僚達から御世辭にも「字が巧い」と讃められる

のも戸口事務扱當の賜だ。斷然群を抜いて收發件數の多いのも誇りの一つ。日々の机上は正に是れ精神修養の靈場、禪味を解せんと欲するものは須らく戸口係を志願すべきである。然るに、筆硯を目して「時代錯誤」「明治時代の遺物」とと誦評し、東洋の誇りを目撃して其の效用を否定せんとするが如き者は、宜しく床の間の掛軸を外してエチオピアへ亡命せよ——と云ひたい。殊に、戸口の狀態を知悉して警察上の資料に供すと云ふ領土統治上戸口事務が如何に大なる使命を有するかを認識せず、徒らに「警察機能の四割を侵蝕し、變化に乏しい戸口事務は厄介な存在である」等と極く人に對しては我また何をか云はんやである。

却説、調査部及用書を對象として洵く「趣味」に至つては、本島人の習俗、人情、境遇等までが窺はれ、興味津津々として盡くるところを知らない。其のホンの一部に就て述べよう。

「名は一生の運命を支理す」と観相學者は云ひ、命名辭典の序文にも書いてある。勿論迷信だとは承知しながらも、動もすれば其の迷信に提はれ勝なのが凡夫の通有性だ。

茲に、周爲學なる者が戸主相敏したと假定する。先づ「爲學」なる二字に魅力を感じて筆持つ手は紙面に吸ひ付けられ、一家に對する種々の想像を想像を生む。果せるかな、其の妻は平凡な周陳氏姐妹と云ふ名であるが、五男三女は周仁伯、周義博、周禮仲、周智明、周信季、周氏月英、同花鸞、同雪娥とある。即ち、男の頭文字には仁義禮智信を配し、女には月花雪を冠してあるところ父親周爲學の常識の富ならざるを推察すると同時に、之等子女達の幸福さ、聰明さ、利發さ、低雅さまでが想像されて未知の人に對する關心が搔頭

する。素より家は富裕であり、戸主は社會的地位を有する人格者であらう。戸口係たる者快哉を叫ばずにみられやうか。

出生届に對する趣味は又格別である。月娘、碧霞、彩雲、玉英、秀鳳、金鳳、秀麗、玉蘭等の命名は漢字の郷察濤として寔に相應しい趣があり、出生子の幸福な姿が眼に浮かぶ。之に反し、乞食、石頭、臭頭、噫番、和尚、番婆、悪仔、查某等は如何に無智な迷信に因るものとは云へ、出生子の將來が案ぜられて、父親の無學、不見識を憐むと同時に出生児に代つて義憤反感さへ起さる。

愛嬌、含笑、鳥録、酒勢、大目等は出生當時の様様によつて命名したものであるが、成人の醜は慙かし親を恨んで歎息久しふするであらう。千金、添子、末妹、六妹等は其の出生別を推測することが出来、同市、阿完に至つては下層階級の家産狀況までも窺はれる。

(個々の名に就ての興味ある分解は本島人に就て研究して頂きたい。) 德福、萬福、必財、順德、貴銀、添財、阿金、寶玉、貴興、富貴等は財物に對する熾烈な慾望心の表現とも云へやう。但し、そんな家庭に限つて經濟的に恵まれない現狀にあるのを普通とする。

女の名の春霞、金花、春輝、梅蓮、梅鸞、麗花、春葵、春花等は氣節を取つたものであらうが、買價價格に對する考慮も拂はれて命名せられたことを見通してはならない。春に因んだ名が多いが、夏秋、冬に關連した名の極めて少ないのは不思議の一つ。茲にも察察人の心理狀態を偲ぶことが出来よう。

勳輝、勳仁、天上、壽廷、玉生等は天壽の掛念がある(全島戸口係諸君調査簿を繰つて見給へ、私の言の強も迷信ばかりでもないことと判明するであらう。)可惜は死産届又は出生届と死亡届と同時に

提出される悪運な兒に附する愛惜の名前である。

調査の結果、女の名として最も多いのは玉、秀、閑、風の四字。姿態の美が察せらるゝ。

近時著しく増加した審人の内地式命名は最も嬉しい現象だ。第二の國民よ！強く健やかに成育せよ！と祈らずにはゐられない。

渡繁當時の出生兒達が、早くも人生の甘美な家庭生活に入る婚姻劇は、多感な私に何を暗示し何を教ゆるか？嗚呼——

戸口事務に就ての「趣味」の研究は之位にして次に移らう。

二、審童教育と趣味

審童教育——桃源の幽遠境に育つた原始人の子弟を教へ導いて穩健な國民を養成する——と云ふそれ自體が已に趣味そのものでなくてはならぬ。

私は渡繁當時、公學校朝の登校時に於ける教師對生徒の護理一片な親しみの薄く如何にも冷淡な光景を目撃して、異様の感にうたれた。そして、それは教師の官僚的態度の罪か又は、生徒が父兄達から不知不識の裡に積まつけられた潜在的民族意識の兆か？と云ふ疑問があつた。爲に、教育責任を命ぜられた時は、その師弟間の積弊を除去して内地小學校に見るが如き融合一致、天真烂漫の氣分を醸溢せしむるには如何にすべきか——の問題が起つたが、實際に臨んでそれは杞憂に終つた。

即ち、先生々々と尊敬する父兄達の嬌りない純情、兩腕に構み制服の裾に隠ひ付く無邪氣な審童の熱烈な敬慕、私は忽ちのうちに神

聖無垢な子供の世界に誘ひ込まれて童心に歸つた。

各科教授の際に於ける夫々の部分的な趣味は餘りにも多い。簡言すれば、日々智に醒めて伸び行く審童に對する擔任者の心は、子に對する「立てば歩め」の親心のそれだ。

整當者の愛を獨占せんと競ひ寄る子供通有性の本能的心情を思うては、低能兒や不良兒の悪戯を怒すべく、時たま振り上げた怒りの手も忽ち變じて愛撫の手となり、先だつものは悔悟の情「先生さようなら」と僅か一夜の別れを惜みて暫し門邊に佇む小さき姿のいじらしさ、抱きしめたいやうな衝動」とは蓋し其の時のことか。そして寒さに震へながら薄暮の彼方に消え行く見事らしい審童の後姿を見送るとき、教育者の眼に浮ぶものは「幸あらせかし」と神に捧ぐる儼然、愛育、熱誠、祈願のカクテルの雫。かくて、教育に對する趣味と、審童に對する愛情と、將來に對する希望とは次第に其の濃厚さ執着さを増して行く。

今や審童隔なく國語の朗かな聲、青年男女達の時代に對する自覺、それは云ふまでもなく趣味によつて精練された教育整當者の努力の賜と云はずして何ぞ！。

一言附言したいことは、出席率の多少、教授法の良否、教育所の成績は總て擔任者の趣味の程度に正比例すると云ふことである。

三、監督者と趣味

前任者が如何程式練家であり又、如何程熱誠であつて、諸般の事象が萬端に近かつたとしても、後任者たるものは宜しく創造的飛策

を繰りして尙百尺竿頭の意氣がなくてはならない。若し、前任者の進れる道を踏襲し、遺蹟に甘んじて唯至れり盡せりこの謂解のみ呈するやうでは、監督者としての信念を没却した平凡無爲の人と斷ずるを憚らない。況してや抱負、輕論と云ふやうなものには人によつて其の見解を異にし趣向を別にする。而已ならず進々乎として停止するところを知らし世の中だ。満足と云ふことがあり得やう筈はないと云つて、部下の之を任けて自己の非を強要するが如きは唾棄すべき越俎だ。又無暗に功を專つては蹉跎の危険が伴ひ易い。さて、監督者となつて始めて頭に浮ぶものは、他の監督區を凌駕して優良な成績を風ち得るには如何なる最善無比の方策を樹つべきやの問題である。それには偉い人の言を倣つてもなく、部下職員の統御、部民の指導、區内の開發の三つでなくてはならぬ。其の企圖を可成の理想の彼岸に接近せしめたいと云ふ希望と、着々と實現し行くこよなき胸抱とが所謂趣味の本體であらう。

監督者は部下に對して嚴父の如く且つ慈母の如くあれとは嘗て聞いた言葉である。此の點審察教育と似て非なるところだ。即ち、無邪氣な兒童であつて時に技巧の教養の必要あるに反し、之れは苟も相當常識を備へた職員だけに常に公正無私の態度と、清濁併せ吞むてふ度量とを必要とし、責任もあり苦勞も多いが又、それだけ張合も多く期待も的確である。自分の心を全部の職員に徹せしめ和衷協力一團となつて進んだならば目的を邁ぎる何物があらうか。そこには、確執もなく、反目もなく、自我もなく唯警察の爲にてふ至誠盡忠の氣分のみが溢るゝ。それ以上の妙味が、愉快が、矜りが何處にあらう。殊に、變態的や生靈箱者の所謂偏見者、厄介者の不

純分子が、自分の感化を受けて矯正せられ覺醒した時の満足は萬金に代へ難き收穫である。巡視の際の如き、子の面倒を見る親の心を以て臨めば山坂辿る足も軽い。派出所、駐在所員としても時に起り易い「又巡視か……」と云ふ厭厭氣分などあらう筈なく、事務成績は常に滿點である。鞭撻訓誨苦言を呈し怒聲を浴びて始めて歡樂を感ずる趣味の如きは犬も喰はない。若し不充分の點があつたらば、自分の不徳を嘆じて禍を垂れよ！必ず部下は其の意氣に感じて十二分の成績を齎らすであらうほどに。

人を見て法を説け、部民の指導方法も地方により又、種族によつて多少異なるは否み難く、且つ寛嚴宜しきを得て信實必罰を念とすべきは勿論であるが、同化政策の根本義たる一視同仁の聖旨を奉戴し、所謂人の喜びに後れて喜び、人の憂に先だちて憂ふ慈悲惻隱の情と、熱誠鐵をも溶かすてふ感化力を以て接遇すると云ふことが効果的ではあるまいか？愛護に双向し、劍なきは古今の眞理である。此の點考慮に入れて、各種不良分子の改過遷善以功償罪と、智能低級な部民の啓蒙と、從來の釋縛葛藤の一端を「趣味」の一對象として進みたい。そこには種族もなく民族もなく理想の平和郷が出現して、我住む郷に一人の非違者もないと云ふ警察最終の目的に達するこが出来やう。何となれば、「趣味」より進ばしる熱は絶對的であつて所期の目的を貫徹せずにはおかないから。

私は殆んど平地勤務だつた關係から本島人指導上の趣味は相當廣汎であるが、蕃地の巡視區監督は僅々一年に未だず、従つて體驗も淺く素より語るに足らないけれども、茲には蕃地著人指導に就ての一例を挙げることにする。

審人に體育を施して健全な思想を養成し、情操觀念を喚起して殺伐な氣風を一掃すると云ふ見地から、受身職員と語り、各駐在所毎に附屬運動場を開設して遊園期を利用しては審人の自發的運動態を煽り、夜間は夜學會の傍ら青年男女に美的情趣をそゝるやうな歌謡と舞踊とを徹底的に指導奨励した。自分自身も彼等と共に走り、俱に手を連ね月明を浴びて幾度踊つたことか。又、其の効果を普遍的ならしむるため、當時私と趣味を同じふした(岩崎君現東京支廳大南駐在警務)と共に、審人土地調査や審社宿習酒場等を兼ね奥地審社にオルガンを運んで指導したこともあつた。夜もすがら南京鐵の聖照を敬悟しての巡回奨励も所詮は趣味なればこそで、安天下に終日輪を垂れて餘念なき釣人と同様に「趣味」の前には何等の痛痒をも感ぜない。自己宣傳のやうに聞えて抑か汗顔の至りだが事實は雄辯である。彼の大武支廳浸水警越一帯に在つて活氣あり節度ある生活を營むバイワン族四百審人達こそ趣味の對象だつたのだ。

部員指導の願望な進行に附隨して訪れるものは統治の最終目的たる内地延長の輝やかしい發明であつて、滔々として流れ込む各股の文物制度が雄然と展開する。現在、教育が普及し、衛生思想が發達し、風習が改善せられ、産業が振興し、さうして民衆の生活様式が漸次向上し着々として植民地政策の最高峰に向つて躍進しつつある樹勢を何と見るか？其の地方開發の現状を、より一層促進せしめて待望への距離を短縮するには「趣味」の濃厚化を必要とする。よしや自分の創造的獻策が或事情の下に採用せられなかつたとしても、それが若し至誠率公の熱情から湧き出たものであり且つ遠算がなかつたならば、必ず實現の必然的可能性があり、自分の在任の有無に

拘らず何時かは具體化して領土開發上に一臂の貢獻を齎らすであらう。その時の名狀し難い崇高な愉悅快絶と一種の矜一私はそれを稱して「趣味の果實であり人生無上の慰安である」と常に云ふ。

結論に代へて

此處までペンを運んで來たとき、九月號本誌上に明春新年號の懸賞課題が發表せられた。其の論文中に「諸般の警察事務に關する研究」なる一題がある。

私が鳥辭がましくも「警察と趣味」などと云ふ柄にもない表題の下に兎東ないペンを執つた所以は、要するに、警察事務に對する「趣味」を喚起して能率を増進し、創造力を養成し、依て以て警察の機能を遺憾なく發揚する一と云ふにあつて、約言すれば「警察事務に關する研究」に外ならない。即ち私の云はんとするところと課題の趣旨、目的とは相共通する一致點があるやうに推測せらるゝ。故に以下幼稚なペンを繼續するの勇氣なく、又其の必要も認め難く從て、結論も姑らく保留し一先づペンを擱くこととする。

實くは正月號本誌上に於て、會員諸氏の總獎を領注して研究せられし「警察愛」の誇々たる爽やかな響きに振りたいものである。

斷想

洪耀勳

地下室の人間

地下室の地下窟たる所以は、そのもつ獨特な暗さである。此處には天上の光のとよかない闇の世界が支配してゐる。而てこの暗夜に點火し我々の手引をなすものは、人間のもつ不安である。我々は日常に於ては、たと習慣に従うていはゞ隨性的生活を繰返してゐるにすぎない。兎に角、無反省的に、平生やり來たりの仕方、その日其の日を送つてゐる。我々は日常性にあつては、現實に對して何等の憤懣もなく、抗議もない。日常性に於いては、すべてが合理性に適うて滑らかに運ばれる。それ故、我々を根幹から揺ぶり動かすやうな不安はない。日常性にあつては、懷疑はない。あるのは好奇心ばかりである。好奇心は一つの物事に留つてそれに透徹することなく先きへ／＼と先き走りをする。好奇心の動くところ噂が生ずる。噂は實に日常性のもつ一面をよく示してゐる。また流行もその一つであらう。日常性にあつては、自然であることが嫌はれる。昨日太陽が東から昇つて西に没したと同様、今日も東から昇つて西に没す

るであらうし、冬去りなば春も遠からずであらうところの自然法則、普遍性、合理性が日常性の支へをなしてゐる。科學は方に事物のこの自然必然性の認識に存する。常識や慣習も自然的であることは勿論である。また理性もデカルトの「自然の光」を意味してゐるにすぎない。この自然必然的であること、合理的で普遍的であること、科學の本質をなすと同時に我々の日常生活の據り所である。我々はいかに合理性に立つて、信じて疑はないから何等の不安を感じることなく、慣習に従つて生活出来るのである。現實は、そのまま受け入れられ、肯定される。然かし我々はいつまでもかゝる状態を支持しうるものでない。文化史的に見ても、科學の發達、進歩の爲めに、理性は日常的なものに抗議し、現實に憤怒することなしには絶えず現實に抗争し續けて來たのである。前述の如く、科學の本質は合理性であるから、その現實への抗争はあくまで、合理性の非合理性に對するそれである。而してまたこの争ひは同じ平面に立つてゐる同次元の世界の争ひであるは勿論である。

然らば不安に戰く地下室の人間の叫びは何であるか。そのもつ不安は何であるか。その現實に對する抗議はどういふものであるか。そのいふ現實は、日常性の現實と同じものであるか、或は異なる意味を有するか。

この兩三年來、しきりに不安の文學とか、不安の哲學とかの流行を見てゐるのであるが、このことに關聯して、この不安に何か客觀的な社會情勢が存するに相違ない。がしかし、それにしても不安はかゝる客觀情勢のみから、説明し盡されないもつと主觀的な人間そ

のもの、本性に根ざしてゐるのでなければ、いくら非常時の客観的
情勢にあるからとて、人は強ち不安に陥入ることはないであらう。

不安の文脈、不安の哲學は決して世評のやうに單なる懷疑論とか
厭世論として評し去られるべきものでない。それは實に人間の本性
そのものに根柢を有してゐるからである。不安は一面懷疑の情緒で
あらう。しかし、懷疑は決して單なる好奇心でないことは前述の通
りである。地下室の人間のもつ懷疑は生の根本現象の一つである。

我々は日常性、合理性の爲めに、主體を喪失し、「平人に墮ちてゐ
るのであるが、主體がそのもつ不安、懷疑によつて、日常性、合理性
に對して、抗議し、それから距離をもつことによつて自己を恢復す
る。即ち日常的、公的な社會諸關係から、自己を遮斷することによ
つて、日常性に於いて逃避してゐた死とか、無とか、運命とかを、生
と死とを賭けてまじめに受取ることである。而し、非合理性に立つ
不安の對象とする現實は、合理性に立つ日常の意味する現實ではな
く、寧ろ日常に對しては、非存在と思はれるもの、或は無である。

これを現實といふならば、すぐれた意味に於ける現實である。我々
が確固と立つてゐると思はれる自然必然的な、合理的な普遍的な地
上が、突然裂けて、深淵が口を開くと感ずる時、日常に於いて蔽ひ
隠され、無いと思はれてゐたものが、この不安の薄明の裡に、唯一
の現實として我々に顯はになるのである。常識と科學が存在しない
もの、若くは否定的にしか存在しないと考へるこの蓋然的な、突然
的な闇の地下の世界は、日常のそれよりも深い、その永遠な根源的
な非存在若くは、無は、優れた意味に於ける現實として、日常性の
哲學が考へるよりも遙かに深い。地下の世界にあつては、常識で自

然的と考へられるもの、科學の法則や理性の命ずる規範などは、拒
まれ排撃される。この自然とか、法則とか、規範とかの如きものは
いつも「我々すべて」「或は人間一般」の立場を意味するものであり
その有する普遍性、必然性、自明性は、何等辯明も擁護も必要とし
ないほどに健全な普遍的な領域である。地下室の人間は、こ
のやうな普遍性、必然性、自明性と争ひ、それらを克服して、それ
らより解放せんとする「個別的な生きた人間」の抗争である。よ
り深い唯一の現實は、我々日常の觀念を以てしては、汲み盡されえ
ない豊かさを蔵してゐる。

凡て「生」といはれうるものは、時間的空間の統一態をなし、そ
の環境に抵抗し、または反題する中心を自己の中に有するものであ
つて、それによつて世界全體と矛盾ない調和を採つてゐる。しかし
人間はこの上に、世界全體から、またその肉體そのものからも、自
己をはなして看ること、或は距離をつくることができる。即ち客體
的なものから、主體的なものに退くこと、即ち超越が可能である。
換言すればロゴスに對して「パトスの距離」が可能である。人間の
存在は、蒸餾された無味乾燥な數學的公式の如きものでなく、熱情
と反對物の矛盾にみち／＼た悲劇的存在である。悲劇的存在とは、
人間は日常性に抗議し、喪失された主體をとり戻してその本來的存
在のもつ不安、焦灼、死、運命に立たねばならないこと、即ち運命
を逃れるのでなく、却つて運命を愛さねばならない主體の悲劇性格
を謂ふ。天学者、一般者にのみ奉仕する理性から看れば、一切は明
朗にして透徹に看える。理性の立場は、アポロニオス的樂天主義で
ある。これに反し、理性、合理性に抗議する地下室の人間のもつ熱

情不安は、デイオニソスの虚無主義である。

地下に退いた人間の内面は、常に懷疑、抗爭、否定が顔を出す。地上には光があり、地下には薄明がある。天の光を我々に指示する理性とは異なる何か非合理的なもの、死とか、魂命とかが、宇宙に於ける我々の地位が如何に渺茫たる大海の一粟にすぎざるを悟らせるとき、我々は測り知らざる生の現象の真確中に、たゞ茫然自失するであらう。人間は、世界と緩和し萬事圓滑にやつてゆける間は、世界との距離を感じないが、一度薄明に立つて、その無氣味に働くとき、自己を不幸な、悲慘な存在として、この世界は假の窟と思はれ「人生は萬物の逆旅」といふ感を深めるであらう。しかし、人間はこの無の國の住人となる時、根本的内面的窮迫に陥るとき、徒らに憂鬱、徘徊、焦慮の中にその無力を嘆くよりほかないであらうか。人間は無に耐き當るとき、死への配慮がなされ、内心の叫びや良心の聲をきくのでなからうか。人間は、その欲すると欲せざるとに拘らず、宿命的に世界の中に投げ出されてあるのである。何故人間は世界の中に投げ出されてあるか。その意味如何。この問を發したこの間に正確に答へうる人間は獨り地下室の人間のみである。地下室の人間は、自然法則、日常的な感情、理性などに叩頭する奴隷でなく、むしろこれらに對して、激しく憤怒し、抗議し、無なる可能性の上に立つて、自由な企圖をし、新しい倫理を確立し、生に處してより多き生を獲得するやうな、客體から離脱してその本來的主體に還りうるやうな行爲的主體でなければならぬ。無は死であることは確かであるが、それがたゞ死であるならばそれが同時に自由であり、可能性であるとはいひ得ない筈である。それ故に死はまた

生でもなければならぬ。無は我々がそれに於いて生れ、また死ぬ場所であり、日常の自然的時間とは次元を異にした根源的な時間である。我々はこの時間に於いて死ぬべく生れ、また生れるべく死ぬのである。地下室の人間は、實にこの無の本質を理解しうるものでなければならぬ。地下室の人間は、ニイチエの云ふところの「超人」であつて、シエストフのいふ無からの創造にいそむ新しいタイプの人間でなければならぬ。かゝる人間こそ天才であり、超人であるが、新たな世紀に立つてゐる我々に、果してこの超人は、何を語らうとするか。

臺展のぞ記 (一)

東洋畫

美術の秋なかば、茶室美術展覽會第八回が十月二十六日から、教育會館に蓋を明けた。一日、志能圭策、お馴染の漫筆の信坊氏と三人、臺展のぞきに出掛けた。僕には繪は分らんと會ふ連中ばかりでありながら、會場では恐るべき批評家ぶりを發揮して、參觀の人々を唖然たらしめたものである。以下簡単に。

先づ東洋畫、素人目に見て綺麗な繪は多い。色の線の細かさ美しさ。その技巧の妙には感歎しながら、雲をうたれろと言ふほどの物がないのは淋しい。石木秋園氏の「母の肖像」、陳氏進さんの「野邊」、村上無羅氏の「馬關社の印象」など善いものである。表紙繪でお馴染の田部善子さんの二作は、うれしく拜見した。「むかしを語る」の一作は、仲々野心的なもので意圖は分るが、構圖その他に無理が見えて残念。(X)